

首都大学東京都市教養学部人文・社会系
東京都立大学人文学部
「人文学報」第443号
(日本語教育学)
2011年3月抜刷

伊賀上野の外国人住民コミュニティの 言語生活環境

——参与観察調査からの中間報告——

ダニエル・ロング

伊賀上野の外国人住民コミュニティの 言語生活環境

——参与観察調査からの中間報告——

ダニエル・ロンゲ

1. 伊賀上野の多言語コミュニティ

本稿で三重県伊賀市（旧上野市も含むので、以降「伊賀上野」と呼ぶ）に見られる多言語使用を取り上げるが、その予備調査の結果に入る前にどうしてこの地域を対象にしようと考えたかを簡単に説明する。

筆者が2010年7月に伊賀上野を訪れたとき、土曜日の夕方、町の中心部に近い住宅街を散歩していた。そこで三人の女性が後ろから自転車に乗って来た。後で近くにキリスト教会があったことを知ったが、彼女らが筆者に「教会でも探しているのですか」と声をかけてくれて、案内してくれると言った。話してみると、三人は中国人で、向かっている夜のミサは英語によるものだと分かった。筆者は用事があるその夜には行けなかったが、この女性たちの心の温まる行為に感動を覚えて、翌朝のミサに行ってみることにした。

その日のミサは日本語を中心に行なわれたが、多様な母語を持つ人が集まっていた。それが分かったのは、ミサの途中で隣や前後の席の人と握手し挨拶を交わす際であった。そしてミサ終了後に多数の人が初対面である筆者に挨拶したり、歓迎の意を伝えたりしたのである。その日の30数名の参列者のうち、3分の1は外観上日本人に見えない人であった。分かっているだけで、前列に座っていた30代フィリピン人夫婦と小学校低学年の娘、後列にいた50代の韓国女性、そしてミサ終了後に話しかけてくれた30代のペルー人女性がいた。

この外国人コミュニティの親切さも記憶に残ったが、学者として興味深く

思ったのは、(英で話したフィリピンの人を除いて)全員が筆者に日本語で話しかけたことである。この多言語コミュニティは日本語を共通言語として使っている印象を受けた。これまで筆者が関わってきた日本国内の異民族コミュニティはそれぞれ一つのアイデンティティを持っていた。石垣島の台湾系島民や茨城県大洗町のインドネシア人がそうである(ロング他2010)。そして、小笠原諸島の欧米系島民は歴史的に多数の民族にルーツを持つが、20世紀には「欧米系」という統一的なアイデンティティを持つようになった(Long 2007)。日本語以外の言語と言えば、石垣は閩南語、大洗はインドネシア語、そして小笠原は英語であった。

一方、伊賀上野で感じたのは、ブラジル、ペルー、フィリピン、韓国、中国など別々の言語を話す人々が、日本語を共通言語として、お互いを助け合ったり支え合ったりしている状態である。今後、伊賀上野の外国人住民がどのような多言語生活を送っているかを知りたいと思っている。そのコミュニティの人々と協力して、その状況を調べるとともに、できる限り彼らが日常的に抱えている言語問題の解決に応用できるような研究を目指したい。こうした参与観察型の研究に先立って、本稿では伊賀上野の多言語環境を概説してみる。

2. 伊賀上野地域はどのような言語生活環境か

三重県伊賀市の約20人に一人は外国人である。ここでは筆者が見た多言語コミュニティについて報告する。

伊賀市の約10万人のうち、外国籍の人は4,500人以上いる。全人口の5%近くが外国人である。21年度8月の国籍別のデータ(表1)から言語を推測すれば、約2,500人がポルトガル語、約500人がスペイン語、約1,000人が中国語の話者である。

表1 国籍別伊賀市外国人登録者数と割合（平成21年8月末現在）

伊賀市外国人登録者数 ÷ 伊賀市の人口（外国人含む） = 住民に対する登録者の割合 (4,673人)		(100,846人)		(4.63%)	
アフガニスタン・イスラム共和国	8	ロシア連邦			4
オーストラリア連邦	3	スリランカ民主社会主義共和国			5
バングラデシュ人民共和国	11	タイ王国			124
カナダ	3	オランダ			1
中華人民共和国	952	ドイツ			1
フランス共和国	1	英国			5
ガーナ共和国	1	アメリカ合衆国			8
ギリシャ共和国	1	ヴェトナム社会主義共和国			69
インドネシア共和国	58	ブラジル連邦共和国			2,454
イラン・イスラム共和国	2				
ケニア	2	ペルー共和国			428
大韓民国	345	アルゼンティン共和国			26
朝鮮民主主義人民共和国	35	ボリヴィア共和国			13
マレーシア	2	チリ共和国			5
モンゴル	8	コロンビア共和国			1
ネパール	1	グアテマラ共和国			1
ニュージーランド	4	メキシコ合衆国			3
パキスタン・イスラム共和国	6	パラグアイ共和国			5
フィリピン共和国	69	ヴェネズエラ共和国			6
ルーマニア	2	スペイン語圏合計			488

出典：http://www.mie-iifa.jp/population.html

3. 中部地方に見られる多言語状況

伊賀上野が位置する中部地方の言語景観（庄司他2009）的特徴の一つはポルトガル語の使用にある。例えば首都圏や京阪神で見る交通関係の標識は多言語表示になっていれば、日本語と英語、これ以外があれば、中国語と韓国語が加わる（井上史雄2000の言う「JECK表示」）。首都圏や京阪神でポルトガル語を目にすることはさほど多くない。一方、中部ではポルトガル語が標識を見るのはかなり一般的である。以下の図1名古屋駅の多言語表示である。上の写真に見られるのは日本語の「精算機」英語の「Fare Adjustment」、韓国語の「정산기」、中国語「补票机」及びポルトガル語の「Ajuste de Tarifa」の五言語である。興味深いことに平仮名表示の「せいさんき」も併記されている。これは漢字弱者

である子供のためかもしれないが、乗り越し精算をする小学生の姿は少し想像しにくい。むしろ「漢字が読めないけど日本語が話せる」外国人のためではないかと思われる。いずれにせよ仮名表示は外国人にはありがたいものである。下の写真にも日本語「名鉄線」、英語「Meitetsu Line」、中国語「名鉄线」、韓国語「메이테츠 선」とポルトガル語の「Linha Meitetsu」の5言語表示である。このように中部地方においてポルトガル語が多いのは日系ブラジル人が集中しているためである。首都圏や京阪神にもブラジル人がいるだろうが、集中の度合いが違うであろう。

ブラジル人に対する中部地方の人の意識がいかにも関東や関西のそれと違うことを表すエピソードがある。筆者が2007年に中部地方の大学で集中講義をやっているときに、受講生の十数人の中にフィリピンと日本人のハーフでタガログ語が話せるバイリンガル男性と、アメリカ人の父と沖縄の母を持つバイリンガル女性が含まれていた。それだけに日本社会の多民族化は「将来の可能性」ではなく、もはや日常的な現実だと思い知らされた。それ以上に驚いたのは中部地方出身者である受講生の意識であった。集中講義の三日目にある女性が授



図1 名古屋交通機関のポルトガル語を含む多言語表示

業に遅刻して来たが、休憩時間に筆者にその詫びと事情説明をした。怪我がなかったが、交通事故の被害者になっていたらしい。他のクラスメイトに、ぶつかってきた相手の車の運転手がブラジル人だということを語った次いでに、「交通事故と言えばブラジル人だろう？」と付け加えた。周りの学生が納得した顔をして縦に首を振っていた。もちろんこのエピソードでブラジル人に対する差別的発言が気になるのだが、民族差別は（残念ながら）日本などの社会において今に始まった新しい現象ではない。それよりも日本に生まれつつある意識の地方差に筆者は驚いた。関西や関東でこうした発言があったら、周りの学生はただ意味不明のものとして受け取るだけであろうが、中部の学生は皆この発言に戸惑いなく同意していた。この発言に現れた民族間の摩擦や民族差別が生じていることは残念だが、日本人のブラジル人に対する意識には大きな地域差があることが事実のようである。

4. 観光資源としての方言使用

さて、伊賀上野の多言語状況の実態に話を戻す。伊賀上野は他の多くの地方都市と同様、現在、方言を文化的観光資源として活用している。図2（左と右）に見るのは町の入り口で道をまたがるアーチ看板である。「いがうえの ようおこし」（標準語の「いらっしゃいませ」に当たる表現）と「芭蕉生誕の地 いがうえの またきてだーこ」（「また来てください」の意味）である。



図2 「ようおこし」と「またきてだーこ」

こうした「我が町へようこそ」のようなメッセージは全国各地に見られる。(この現象についてはロング(2011予定a)を参照されたい)。

「また来てだ〜こ」は町のあちこちで見かける。以下の図3は社団法人の伊賀上野観光協会の施設の出口に設置されている看板である。だんじり会館には3基のだんじりと鬼行列の展示が常設されており、ホームページには「上野天神祭の臨場感を感じることができるほか、大迫力の300インチ三面マルチスクリーンとステレオ音響で表情豊かな上野の四季を紹介」と書かれている。同じ施設には伊賀上野地場産買物処、および伊賀上野観光インフォメーションセンターが開設されているので、たくさんの観光客の目につく看板と言える。

伊賀上野の尊敬語表現「〜てだ〜こ」はこれ以外にも町の数箇所で見かける。「来る」以外に「使う」や「する」という動詞と使われている。例として、上野市の駅の「伊賀忍者の里へようきてだ〜こ」(図4)、町各地の観光案内所に掲げられている「お気軽に、使うてだ〜ご、お手洗い」(図5)、茶屋の前にあった「どうぞ一服してだあこや」(図6)が挙げられる。



図3 だんじり会館の「また来てだ〜こ」



図4 上野市駅の「ようきてだ〜こ」



図5 観光案内所の「お気軽に、使
うてだ〜ご、お手洗い」



図6 茶屋の「どうぞ一服してだあこや」

5. 交通安全メッセージに見られる方言使用

観光客向けのメッセージ以外に方言がよく見られる使用領域は交通安全である（ロング2011予定b参照）。方言を使うとふざけた印象を与えかねない場合もあるので、交通安全に方言が各地でよく利用されるという事実は意外に感じるかもしれない。しかし、筆者が言語景観を課題にして行なっている授業では多くの学生が「標準語で書かれている注意呼びかけ看板は見慣れてしまっているが、方言で書かれていると意外性があり、印象に残りやすい」というように解釈をしているのである。方言が使われる理由はともかくとして、伊賀上野にもこうした類の表示を見かけた。

図7は伊賀上野周辺地域の飲食店に貼られた飲酒運転撲滅運動に関するものである。沖縄など他地域に見られる同じ類の表示に比べて方言で書かれている部分は多くないが、数箇所に見られる。それはお客さんの発話となる「引用文」

にも出て来るが、店主の視点から書かれた地の文にも登場する。



図7 方言を使った交通安全表示類

字が小さいので、表2で確認する(方言の箇所を下線を引いた)。

表2 レストランの方言表示

言ったらお得です。

今日の運転手役さんには? 「今日はお酒を一滴も飲まず仲間達の足になる。」(イヤヤけど) 「今日は家族の足やからお酒は我慢する。」(飲みたいけど)

今日の運転手役さんごくろうさまでございます。お酒をがまんするかわりに、店主からサービスありますよ〜。誇り高く「今日はワタシが運転手」って言うてね〜。

お食事だけの、お客さんにも?

「もともとお酒飲まれへんねん。」(美味しい料理は好きやけど)

「今日は、お酒は飲まない日やねん。」(飲みたいけど)

お食事だけでも来てくれはった人。ほんまにありがとうございます。お礼に店主からサービスありますよ〜。気軽に「お酒ノマれへん」って教えてね〜。

6. 伊賀上野の町中の多言語状況



図8 「喫煙所」の多言語表示

本稿の第2節で大都市名古屋で見られる多言語表示に触れたが、地方都市である伊賀上野にもよく見られる。図8は伊賀上野観光協会事務局の入口にある多言語の銘板サイン表示である。使用されている11言語を表3に挙げた。

ちなみに伊賀上野は忍者の里として知られているが、写真の中央に書かれている文字らしき物は、伊賀市役所の商工労働観光課が2010年に、子供の観光客向けに発案した「忍者

表3 喫煙所の多言語表示

1. 日本語：喫煙所
2. 英語：Smoking area
3. 中国語簡体字：抽烟区
4. 中国語繁体字：抽煙區
5. フランス語：Espace fumeurs
6. ドイツ語：Raucherecke
7. スペイン語：Área para Fumantes
8. ポルトガル語：Zona de Fumadores
9. ロシア語：Место для курения
10. タイ語：ที่สูบบุหรี่
11. アラビア語：منطقة للتدخين
12. (ピクトグラフ、絵文字)

文字」という遊びの表記である。町中にあるこうした忍者文字看板を解読すると商品が当たるキャンペーンが実施されているようである。同課がインターネットで公開している「解読の書」(図9)に従って読み解くと左から「あんないしょ」と書かれていることが分る。

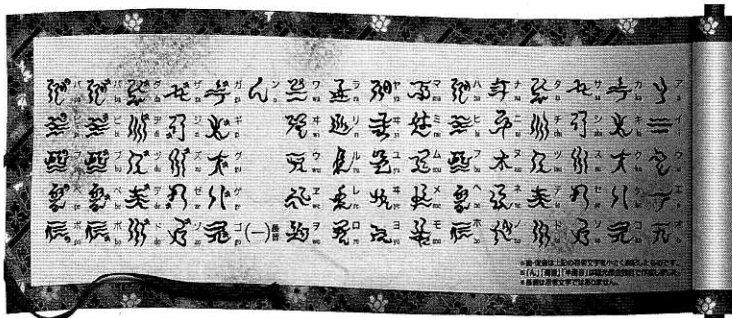


図9 観光課が発案した「忍者文字」

図10に見られるのは市役所本庁の5言語表示である。縦書きに「伊賀市役所」と「이가시청」, 横書きでは“Iga City Hall”, “Municipalidad de Iga” (西語), “Prefeitura de Iga” (葡語) である。



図10 伊賀市役所の5言語表示

さて、上野市駅前にある学習塾の横に、次の多言語表示を見た（図11）。



図11 六言語による駐輪禁止表示

この写真も字が小さいので、内容を表4で示す。

表4 駐輪禁止の多言語表示

Eisu 生以外自転車駐輪禁止です。 在这儿放你的自行车不行。 Don't stop your bike here. No estacione su bicicleta aquí. 여기에 당신의 자전거를 두어서는 안됩니다. Não estacione sua bicicleta aqui.

これの英語は不自然で、普通は stop ではなく park である。それに日本語では「eisu 生以外」と明記されているが、日本語以外の言語では単に「ここで（あなたの）自転車を止めるな。」だけとなっている。

この外国語表示で間違っているのは英語だけではないようである。この韓国

語についてソウルの中央大学の磯野英治（私信2010年12月7日）が表5のように解説し、2点の間違いを指摘している。

表5 韓国語表示の解説

逐語訳（グロス）をつけるとこのようになる。

- 여기에 당신의 자전거를 두어서는 안됩니다.
ここに あなたの 自転車を 置くのは いけません

「두어서는」は日本語の「置くのは」に当たるが、ここではむしろ「두면」（「置いては」）の方が適切である。また、日本語と同じく、あえて『あなたの』（自転車）とするのは韓国語として違和感がある。したがって、修正すると以下ようになる。

- 여기에 자전거를 두면 안됩니다.
ここに 自転車を 置いては いけません

中国語において、中国の佳木斯大学教授の張守祥に聞いたところ（私信2010年12月7日）、表示の中国語はネイティブが書いた物ではないだろうという判断を示した。写真にある中国語は「在这儿放你的自行车不行」であるが、むしろ「此处禁止停放自行车」が自然だろうという回答を得た。

もう一つ気になるのは、窓の内側に貼ってある「No money here（現金は置いていません。）」である。日本語が括弧の中に含まれているのが印象的である。まるで、泥棒向けのメッセージが英語で表示され、日本語はその訳となっている感じがする。数年前に東京で、チェーン店のコンビニにあった偽札防止対策のための「両替お断り」の表示が数ヶ国語だったにも関わらず、日本語は書かれていなかった。これが外国人差別だと批判されて問題となった。この塾の駐輪禁止表示をみれば、自転車の迷惑駐車という軽罪を犯すのは少なくとも六ヶ国語を話す人々であるが、強盗のような重罪を犯すのは英語圏人であるという印象を受けかねないであろう。

さて、上で名古屋駅にあった「せいさんき」という仮名表記の交通案内標識は（日本語が話せるけど漢字が読めない）外国人のために作られたのではないかという可能性を筆者が指摘したが、伊賀上野には明らかにこうした外国人のために書かれた仮名表記の案内があった（図12）。案内作成者（「書き手」）は

(財) 三重県国際交流財団 (MIEF) となっている。



図12 かな表記中心の表示

この写真の主なところを表6に示した。

表6 平仮名中心の表示

<p>がいこくじんのための “Help Desk” Free こまったときに そうだんできます。 Português, Español, English, 中文, Tagalog, Thai, Bahasa Indonesia ひみつはまもります。 あんしんして でんわをしてください。 げつようび～きんようび 9:00～17:00 (財) ^{みえけんこくさいこうりゅうざいだん} 三重県国際交流財団 (MIEF) MIEFでは、^{がいこくじんじゅうみん} 外国人住民が ^{あんしん} 安心して ^{せいかつ} 生活できるよう、サポートをしています。</p>
--

外国人向けの文章でよく使われるのは普通の漢字仮名混じりに読み仮名のルビを振るという表記法である。(筆者が勤めている大学で留学生向けの案内は原則としてこうした表記法を取っているが、それは本学の留学生には漢字圏の

学生が多く含まれているからかもしれない。)しかし、上の張り紙ではこうした書き方が団体名以外では一行のみ使われている。あとはむしろ仮名(のみ)の表記となっている。

7. 一つの教会の多言語状況

本稿の第1節で伊賀上野に多くの外国語使用者が暮らしていることを見た。そして前節でそうした人を対象に作られた多言語表示を公のところに見た。図12の多言語表示は県の外郭団体が作ったものであるが、掲示された場所は町の教会である。図12の右側にはもう一つの張り紙がある。こちらはこの教会が独自に作ったものである。ミサに関する多言語表示であれば、英語が非常に優位で「主」の立場にあるのに対し、それ以外の言語は「従属的」な位置にあると言える。しかし、この表示ではスペイン語がメインで、英語はその下に書かれており、しかも、スペイン語で表示されている内容に比べて英語は簡略化されている。スペイン語ほど「ていねいに」書かれていないものである。日本語に訳した内容を表7で示す。

大通りの曲がり角の小さなスタンド

表7 多言語ミサの予定表

(スペイン語)

ミサの時間:

一土曜日の夜7:30に

一日曜日の朝9:00に

日曜日のミサの後、

聖書勉強会があります。

(英語)

日曜日ミサ:

土曜日7:30 p.m

日曜日9:00 a.m



図13 教会近くの4言語案内板

看板(図13)には日本語、英語、スペイン語、ポルトガル語で書かれていた。確かに南米人にはカトリックが多いようだが、冒頭で述べたように筆者が行ったこの教会には韓国、中国、フィリピンの信者もいた。

教会の前にたどり着くと、建物の前の立て看板には日本語と英語、ポルトガル語が書かれていた(図14)。これがいつから設置されているか分からないが、教会のホームページにある2001年5月の写真には同じ日英葡の3言語表示の立て看板が写っている。奥に見られる入口の上に書かれている「御聖堂 entrada」はポルトガル語ともスペイン語とも読めるが、英語はない。

教会の月間予定掲示板を見たら、教会コミュニティにはスペイン語とポルトガル語以外の外国人が多いことが確認できた。例えば、フィリピン人部会のミーティング日程があった。多数の言語で開かれるミサの予定も書かれていた。

ミサは原則として土曜日の夜19時半と日曜日の朝9時の週二回行なわれているようである。日曜日朝のミサは日本語で、土曜日夜には様々な企画のミサが行われる。例えば、2010年7月は土曜日が5回あったが、それぞれ以下のようにになっていた。

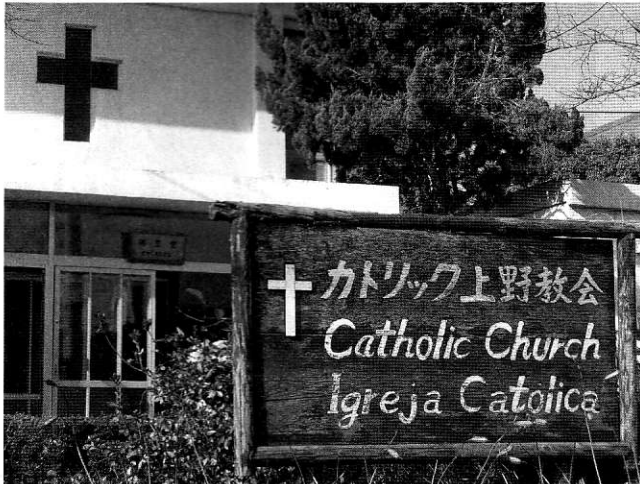


図14 教会の前の3言語表示

- 第1土曜日 スペイン語のミサ
- 第2土曜日 ポルトガル語のミサ
- 第3土曜日 「子どもと共に捧げるミサ」, (翌日の日曜日は9時の日本語ミサに加えて11:30からのポルトガル語ミサがあった)
- 第4土曜日 日本語のミサ
- 第5土曜日 英語のミサ

筆者が訪れた2010年12月の土曜はスペイン語中心のミサの日であった。しかし、聖堂内にある「聖歌板」(図15)が示唆しているように、スペイン語以外にもポルトガル語や日本語の賛美歌も歌われていた。お祈り, 説教, 聖書の朗読にも英語やポルトガル語, 日本語が使われていた。



図15 聖堂内にある「聖歌板」(スペイン語ミサの日)

8. 一つの教会の多言語状況

日本には多言語のコミュニティが増えつつあるが、その中には様々な形態があるようである。表8で多言語状況を個人レベルとコミュニティ（共同体、小社会）レベルに分けて考えることを（筆者が）提唱する。これらを交差させることで4種類の状況が想像できる。左上のAはモノリンガル個人がモノリンガル（単一言語）社会に暮らす場合である。これは日本の伝統的コミュニティに見られる典型的なものである。左下のCはバイリンガル個人が暮らしているコミュニティだが、バイリンガルな人は少数であり、しかも日本語モノリンガル話者に囲まれているため、コミュニティレベルで考えるとバイリンガルとは言えない場合である。これは例えば、外国に留学して帰って来た日本人がいるコミュニティや田舎の外国人花嫁がいるコミュニティなどの場合である。Bは、X語を話すモノリンガルな個人もY語を話すモノリンガルな個人が両方多数暮らしているが、バイリンガルな人が少ないためお互いに会話をすることなく日常生活を送っている場合である。響きの悪い用語だが、これは「ゲットー化」という言葉に当たる状況である。残念なことに日本の移民系コミュニティの多くはこれに当たる。

Tsuda (2009) が調査対象とした群馬県大泉町に暮らす日系ブラジル人のコミュニティにこうした状況が現れているようである。論文では次のように述べている。

Although the Japanese-Brazilians often worked together with the Japanese on the same factory assembly lines, general conversation between the two groups was kept to a bare minimum and was usually limited to work instructions. Likewise, only a few Brazilian nikkeijin have sustained social relationships with their Japanese co-workers outside the factory, have contact with their Japanese neighbors, or participate in local community activities. As a result what interaction they have with the Japanese outside the factory is generally limited to clerks and workers at local stores, banks, and municipi-

pal offices. (211頁)

Tsuda の参与観察および面接調査は1994～95年に行われたが、彼が指摘している問題は相変わらず残っているようである。例えば、2008年と2009年に筆者が大学院生と共に調査している茨城県大洗町のインドネシア人コミュニティにも同様の問題が見られた。大洗町の場合、不自由なく日本語が話せるインドネシア人住民もいる。そしてインドネシア語を熱心に学習している日本人や英語で外国人住民とコミュニケーションを図る日本人住民もいる。しかし、これらはいずれも少数派である。大学院生と共に行った「少人数によるグループディスカッション型」の聞き取り調査では、多くの参加者は自分の日本語コミュニケーション能力の低さに悩んでいると語っていた。また、インドネシア人住民の支援団体（NPO 特定非営利活動法人マナドネットジャパンなど）があるが、そこで日本人住民との交流を促進することが大きな問題の一つだと語っていた。しかし、これは「日本人が閉鎖的だ」や「外国人住民が溶け込まない」ということではないし、お互いに対して嫌悪感を抱いているわけでもなく、ただ言語の壁が越えにくいということを示唆しているのではないだろうか。

表8 個人レベルの多言語状況とコミュニティレベルの多言語状況

		コミュニティ（共同体）	
		モノリンガル	バイリンガル
個人レベル	モノリンガル	A 伝統的コミュニティ	B 孤立化（ゲッター化） コミュニティ
	バイリンガル	C 外国人配偶者のいる コミュニティ	D 交流型コミュニティ

筆者が今回訪れた伊賀上野ではまだ本格的な調査を行っているわけではない。そこに住む外国人住民は同じような悩みを抱えているかもしれない。ただ、少なくとも3回にわたり筆者を暖かく迎え入れてくれたカトリック上野教会を中心とする多民族・多言語信者コミュニティはDの「交流型」とでも呼べるコ

コミュニティに当たると思われる。個人レベルで見ると、母語としてのスペイン語やポルトガル語、英語、韓国語、中国語以外に日本語の話せる外国籍の構成員もいれば、スペイン語や英語など外国語が話せる（あるいは少なくともそれらの言語で書かれた賛美歌を歌おうとする）日本人もいる。そして、コミュニティレベルで言えば、この教会を活動の拠点としているのは上述のように多言語共同体と言えよう。

謝辞

この調査研究は「都市の地域中心性と敬語行動 —第二次伊賀上野調査を中心に—」と題した富山大学の中井精一研究代表の文部科学省科学研究費（基盤B）の助成で行われたものである。

参考文献

- 井上史雄 (2000) 『日本語の値段』大修館
- 庄司博史, P. バックハウス, F. クルマス編 (2009) 『日本の言語景観』三元社
- ロング・ダニエル 2011 予定 a 「各地に見られる方言による歓迎看板」
- ロング・ダニエル 2011 予定 b 「各地に見られる方言による交通安全看板」
- ロング・ダニエル, 張守祥、張愛慶、石坂真央、今村圭介、塚原佑紀、田中節子 (2010) 「石垣島の台湾系島民の日本語—1 話者のケーススタディー—」『日本語研究』30 : 31-50
- 伊賀市役所商工労働観光課 (2010) 「いがにんじゃまちじゅう忍者文字解説の書」
<http://www.city.iga.lg.jp/ctg/Files/1/280000/attach/kaidokunosho.pdf>
- Long, Daniel (2007) *English on the Bonin (Ogasawara) Islands*. (Publications of the American Dialect Society 91). Durham, N. C. : Duke University Press.
- Tsuda, Takeyuki Gaku (2009) "Japanese-Brazilians ethnic return migration and the making of Japan's newest minority" In Michael Weiner, ed. *Japan's Minorities, the Illusion of Homogeneity*, 2nd edition. London : Routledge.